頼三樹三郎の詩碑

円蔵寺境内

（高さ　一六四センチメートル）

北州名勝是禅関　寺在巉巌萬畳湾
夜枕夢清連岸水　暮鐘聲落半空山

柳津宿岡本坊即賦呈主僧之謝

鴨厓　頼醇

鴨厓詩碑跋

鴨厓頼氏夙慨王室式微憤幕府僭竊興士謀欲興王政事泄為幕府所戮明治二十四年特旨贈正四位以賞之初鴨厓負笈於江戸遂歴游諸国此詩弘化三年至会津柳津所賦耿色水聲躍出出筆端嗚呼鴨厓勤王之志興才学之秀不愧為山陽之子矣頃日若松市及各郡有志等胥謀將刻此詩於石傳後世余跋因識一言云

明治四十一年四月

従四位　南摩綱紀（時齢八十又六）

鴨厓舊交馬島瑞園書

（時八十四）

桐樹供養塔

円蔵寺境内

（高さ　三〇〇センチメートル）

桐樹供養塔

由來会津ハ優良ナル桐ノ産地トシテ古來人ノ善ク知ルトコロナリ気候風土能ク優秀ナル桐ノ素質ヲ成スニ適シ栽培亦宜シキヲ得テ遂ニ全国ニ会津桐ノ名声普キニ至ル輓近文化ノ進運ニ伴ヒ桐ノ用途次第ニ拡張セラレ其需要亦漸ク多大ナリ如是世ニ貢献スル所限リ有ル生ナレバ桐樹正ニ霊ス可シ茲ニ同志相集ヒ桐ノ功徳ヲ思ヒ將來益々人類ニ裨益スル所多カラン事ヲ冀求シ塔ヲ設立シテ桐樹ノ供養ヲ為ス所以ナリ

建立委員長　平野平次

会津桐材商同業中部組合ソノ他

昭和十一丙子年九月

植桜碑

円蔵寺境内

（高さ　二二五センチメートル）

植櫻碑

円蔵寺現住

沖津湛宗禅師題額

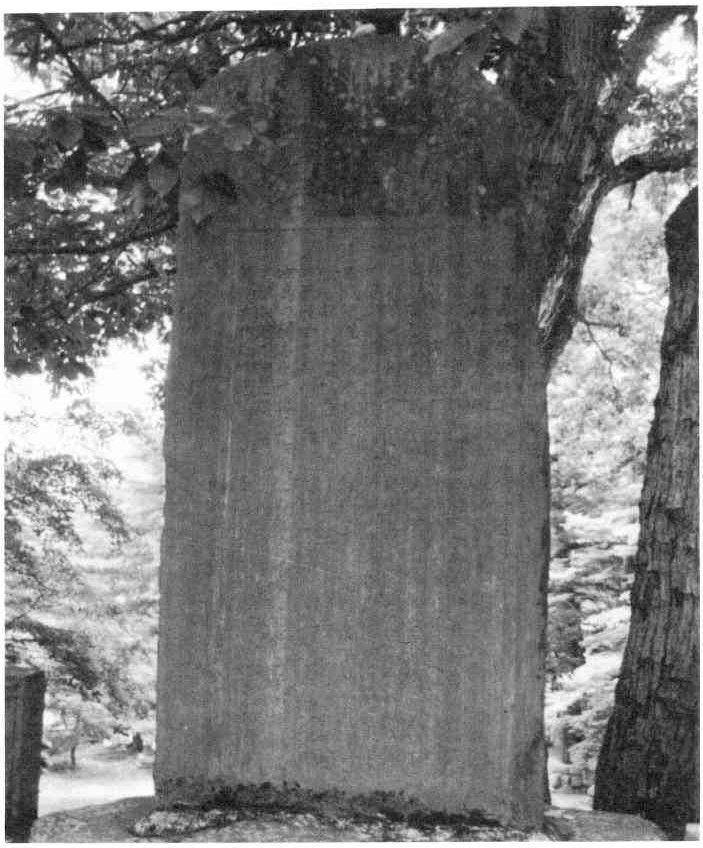
柳津の地たる山水明媚堂閣壮麗なり而して其菊光堂は大同中の創設に係り後屢改造す　今の堂は文政中造る所にして本尊福満虚空蔵大菩薩の木像を安置す其像は弘法大師の手刻なり其他開運罌粟大黒天の精刻魚渕鱗族の群集も亦奇観を以て著はる其霊勝たる人をして俗を避け塵を脱し容を正しうし敬を起さしむ故に文士墨客の笻を曳き瓢を帯びて勝を探る遠近男女の老を扶け幼を携へて本尊を拜する者相踵く然れども花木の美観は目を悦ばするに足るもの尠し若松市大和町紳商初代新城猪之吉君夙に以て憾と為す遂に首唱して老町林平蔵翁等各地の同志に謀り浄財を醵し櫻苗数種を購ひ之を菊光堂城内端光寺山奥之院只見川沿岸上野原銀山川沿岸及小学校庭諏訪神社境内等に植うるもの

無慮二千株植ふるに松梅楓桧槇躑躅を以てす役を明治三十九年六月に起こし大正元年十月に竣り工を須ふる数百人財を費す五百七十円余なり当時桜苗尺許に過ぎず而して地味適し保護至り未だ久しからずして樹長じ花栄え清香人を襲ひ衆木も亦繁茂し翠色滴らんと欲す是に於てか花木の美観と山水の明媚堂閣の壮麗と相称ふるに至る而して仁王門の建立噴水の工事は既に成り鉄道の開通も亦近ころ此に達せり是より世人此地を以て海内稀有の公園と為し勝を探る者本尊を拜する者益々多きを加ふるや必せり　而して猪之吉君は明治四十年九月二日病みて歿す　寿六十三洵に惜しむべし嗚呼天何ぞ年を仮して今日有るを見るに及ばしめざりしや然りと雖も君の功績は山水も並び存し君の名声は桜花と共に香るは言を待たざるなり堂東既に従軍記念碑　忠魂碑　頼鴨厓碑　人形塚碑あり皆其事を録して之を不朽に伝う是を以て同地円蔵寺住職沖津堪宗禅師又碑を建て植桜の顛末を記して君の霊を慰め且同志諸氏の芳名を勒し以て其家運の隆昌を本尊に祈願せんと欲し文を余に嘱す　余因て見聞する所を叙すること此の如しと云ふ

昭和四年十月

宗川　虎次撰

石山雄次郎書



長峰弘運君の碑

円蔵寺境内
（高さ　一九五メートル）

頌徳碑

福島県学務部長大久保住吉題額

長峰弘運君の碑

君は明治元年九月新潟県北蒲原郡川東村に生れ若くして本村に来り野老沢月光寺の住職となる資性温厚恭謙にして気概に富み夙に教育に志し育英茲に四十年名利に趨せず聞達を求めず終始一　本村小学校に職を執る徳高く識博く教えて倦まず学んで怠らず恪勤精励して殆んど家事を見ず常に国民道徳の徹底を念とし諄乎として児童に訓じ慨然として世を誨しむ鑑戒恙く時運に適し子弟の愛慕せざるなく民人の畏敬せざるなし親しく教化に俗せしもの二千有餘人今や有為の材をなす其薫染感化の効洵に大なり茲に子弟等相謀り碑を建て徳を頌し君が雄偉を後昆に仰がんとする師弟の情義掬すべく亦範とすべし敢て文を撰す。

福島県視学　菅野　健撰

梅　亭　鈴木甚吉書

昭和二年八月建之

発起　柳津小学同窓会

佐藤蘭斎翁之碑

円蔵寺境内

（高さ　一三二センチメートル）

佐藤蘭斎翁の碑

蘭斎佐藤常三翁諱俊隆会津藩士也天保四季二月九日生若松城下
資性磊落好丹青始就会津之大家磐山翁学後随藩主容保公駐在京
師勤務傍往來斯道大家有得處戊辰之役従藩軍轉戦各地不利為五
政維新失禄専以丹青立世畫名遍東奥氏又好能楽就東都大家桐谷
氏学極蘊奥後年依妣縁故停足柳津揮彩管傍集子弟教授謡曲余等
亦受師指導幸得登其堂矣悠々自適楽道薫陶子弟二十有餘年大正
元年十一月三日以八十三高齢如眠逝嗚呼悠哉余等後進当樹師碑
記富数奇生涯之一端遺後世云

大正三年十一月師翁三回忌之日

後進　長谷川美材謹撰

寄附者

沖津堪宗　目黒重郎

鈴木亀蔵　佐藤長三郎

佐藤銀五郎　佐藤新七　二瓶美之助

北田忠雄　佐藤義文　佐々木藤四郎

田崎信次郎　山名啓二　鈴木寅三

佐藤真吉　渡部文喜

芳賀兼吉　佐藤安蔵

石川卯吉　伊藤条八

伊藤留吉　菅沼熊四郎

岩佐久松　山内傳造

船木忠次　内田俊次

発起人

二瓶藤四郎

目黒留吉

岩佐豊八

長谷川美材

石川彦三郎

大竹久之進

従軍勲功碑

円蔵寺境内

（高さ　一三〇センチメートル）

従軍勲功碑

無事則修身勤業有事則忘私奉公如北田角田二士豈易得哉北田君
名成美嘗在郷校学術超衆既而入第二師団勤勉方正屢受褒詞帰休
未幾遊東京学醫應試及第会征清役起從在金州屬野戦病院専盡力
救護明治廿八年六月罹疫遂以廿四日歿于南三十里堡平三十角田
君名文三郎世業農初入第二師団役滿皈休亦從征清軍戦威海衛尋
守旅順口又從征台湾廿八年十二月廿日病歿于基隆年卅二君躯幹
魁偉膂力過人二士倶河沼郡柳津村人也同郷諸子深情其死樹碑以
垂不朽死者而有知當瞑於地下矣銘曰

霊巌之下　碧流滔々
芳名千古　水長山高

福島県知事正五位勲五等　小倉信近篆額
福島県尋常中学校教諭　佐藤精明撰
明治二十九年十一月　長岡寛裕書
首唱者　柳津小学同窓会

慰霊碑（右）・忠魂碑（左）

円蔵寺境内

（高さ　慰霊碑　三一〇センチメートル）

（高さ　忠魂碑　三四〇センチメートル）

忠魂碑

元師陸軍大將正二位大勲位

功一級侯爵大山巌篆額

上有萬世一系之聖皇四海一家一旦有緩急則忠勇義烈知有君国而不知有身家故戦必勝攻必取是我国体之所以冠萬国也明治二十七年清国諭盟挾韓国砲撃我軍艦聖皇赫怒発師膺懲之越至明年彼割地入金而請和三十七年露国又背約攘満洲欲併清韓以通我辺疆我乃説以正義彼貪利遂不從互接砲火延及三十八年米国大統領居間調停之彼竟返侵地而和夫両国地大兵衆十倍於我而于海于陸我師連戦連勝奏振古未曽有之偉功萬国寒膽者皆職由之矣福島県河沼郡人從軍歿於清国之役者十二人死於霊国之戦者六十五人奮戦激鬪肉飛骨砕含笑而斃或冒毒熱觸冱寒病而死者亦多其跡雖異殉難報国之志則同忠勇義烈炳焉照千秋矣葢本郡舊属会津藩祖土津公脩政敷明国体以鼓舞士民是以士民忠君愛国之心父以子子以伝孫

皆知有君国而不知有身家故能捐身奉公如此頃者本郡在郷軍人団員胥
謀欲為戦歿及病死者建碑招魂祭之旦不朽其功普擇其地莫　柳津虚空
蔵堂畔焉葢此堂自古以有霊験旦山川明媚鳴于海内今建碑于此則其人
與其地相應矣尚武会諸子協力助之謁余請文余亦旧会津藩士深嘉此挙
因叙其梗概揭　銘曰

一死報国　克効臣節　厥忠厥義

千歳芳烈　柳津地霊　水深山青
魂分有識　永茲来寧

明治四十年七月

従四位勲四等　南摩綱紀撰
研亭　長岡寛裕謹書

柳津発電所記念碑

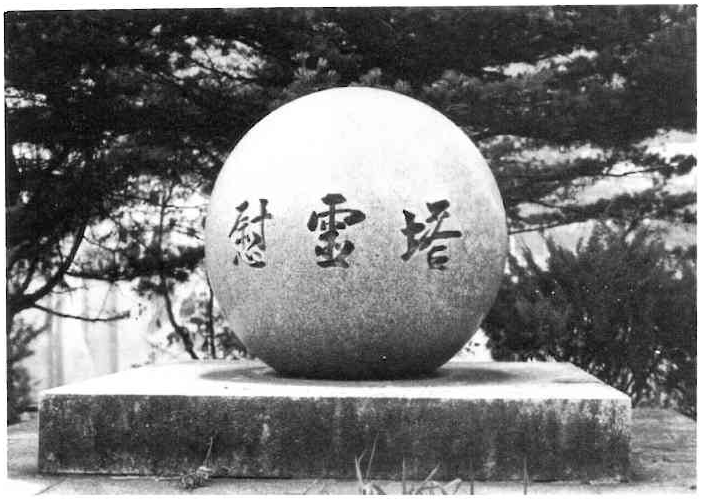
柳津発電所記念碑

この発電所の完成は
地元の人々の理解ある
協力と東北電力従業員の
不抜の努力なくしては
不可能であった
この感激と感謝の
記録にこれを
書く

白洲次郎

柳津発電所慰霊塔

柳津発電所地内



慰霊塔

殉職者

中村　実

深野　常三郎

新井田　ミサ

田崎　友次

五ノ井　和雄

昭和二十八年八月

東北電力株式会社

前田建設工業株式会社

坂上家碑文

柳津町岩坂

坂上家先祖累代之墓

坂上家ハ初祖重郎右衛門　大同二年弘法大師東北御巡化ノ際福満虚空蔵菩薩ヲ彫刻シ給フ霊木ヲ大師ニ捧ゲ奉リシヨリ以来歳ヲ閲スル事壱千弐百弐拾八年代ヲ累スル事五十有餘昭和ノ今日ニ至ル迄家統連綿トシテ円蔵寺　外護ノ職ヲ奉ジ来ル名家ニシテ又全国稀ニ見ル舊家タリココニ近親ノ族相合シ墓標ヲ建テ以テ祖先世々ノ霊ヲ吊フ

昭和八年八月

飯溪目黒先生墓

東京都新宿区市谷河田町月桂寺境内

飯溪目黒先生墓

先生諱尚忠字恕公一字道琢號飯溪姓目黒氏奥州会津人也弱冠来東都以医術称時都下一富商発狂数年衆療無験延先生請理焉先生曰可理矣乃命家人巨桶盛水穴其近底之處置之於高以筧輸水假作瀑布坐患者其下而受水凡一数日惟理全治其後不復発都下哄傳以為扁鵲復生矣其奏奇功往々如此先生於学孳矻白首勤而不倦紫台蘭室之書靡不盡究其奥矣最長於校讐素霊難経傷寒金匱其外泪理療之諸書行間上下莫有白處明和二年乙酉歳吾王父玉池君申於公府而創医学倡集四方医生乃請當時博学広通老成方術者而訓誘督課焉先生以学當術精尒與抂請中矣寛政三年辛亥歳官命吾父大医院令藍溪君教育官医子弟自此厥後選官医有学識者充毉学教授先生独以市井之毉補員教授歳終賜白銀以奬異之先生從醫学之創建出而講醫経者前後三十有四年無有虚年矣同十年戊午六月奉謁大君毎月朔望詣殿廷随從鵶行拜舞而逡惜哉其歳嬰病而歿実八月晦

日也按目黒氏系出畠山重忠之孫重行居武州目黒郷因以為氏後徒奥州
據於佐原盛連其後数世生某称若狭居会津野老沢以名方之孫管一邑事
子孫世々襲職不絶父伊佐衛門有男二人先生居其二焉生而岐嶷甫三歳
稍辨文字兒嬉自聚麻子□作箒子而習九章術人因目為神童既冠憤然自
奮曰吾烏能同野農村民乗鋤耰力作乎隴畝而老死於下邑僻壤之門哉遂
裹足擔笠來于東都師事典薬頭今大路西岡公而肄鑒傳其秘旨初從大番
師青山公不幾辞去游学四方観光上國再帰僑居都下術益精学益密精理
療者曰益夥聲名轟於一時知人魁士多從之游再游事白河矣眷遇甚渥先
生性直実剛外文勝質意所不可面折不置寛政紀元矣為関東補佐居執政
之上同三年先生還禄不復仕焉乎生所著素霊難經傷寒金匱各有註解及
漫筆若干卷娶加藤氏生三男三女長曰三郎早死次曰遵養襲父業為醫次
曰自琢出嗣官醫吉田氏長女奉仕松江矣後宮仲嫁官醫須田氏季嫁官醫
杉枝氏顧言曰帰葬累人無益死者鹿吾死剛葬于此矣於是死之明月窆於
市谷月桂寺之後以余之相識最奮託其墓因系以辞去

顕姓之後　逃于東奥　五百年間
于潜于伏　爰及先生　其興自躬
古風為襮　真実為衷　渉軒轅書
究烈山術　救民沈痾　起人淹疾
教授于舘　白銀賜賞　薦刻已達
奉謁于上　魄窰黄泉　名艸人間
厥子厥孫　視之勿愆

東都法眼侍醫尚薬兼醫学事丹波元簡撰

島原盤瀬行言書

桜植樹記念碑

柳津諏訪神社境内

桜植樹記念

参議院議長

日本さくらの会会長

船田　中

先人は今を遡ること七十有余年、柳津を桜の郷とすべく巨費を投じてこの偉業を成し遂げ、桜の名勝地としての先鞭を築いたところであったが、以来そうした桜樹も天寿を完うして老齢化し、その面影をとどめるには淋しいものを感ずるに至る。

ここに郷土出身三・八会（昭和三十八年生まれ）が立上り、全国的組織である衆議院議長船田中先生を会長とする日本桜会に加盟を認められ、同会から桜苗五百本の協賛をうけるに及び、次いで町行政もこれに参画し、さらに各機関もこの美挙に全面的協力し、又東京柳津会有志が大きな推進力となり、碑背に刻する有志の浄財も多く、各部落等広範な地域にわたり二千本の桜樹と共に楓五百本を植え、柳津の景観に奥ゆかしさを呈するに至る。

かかる美挙を後世に伝うべく、ここに建碑の由来を誌す。

昭和四十九年十一月

内田伊佐雄選文

小林　春駒敬書

軽井沢銀山碑

軽井沢銀山

（高さ　一八三センチメートル）

軽井沢銀山碑

正五位子爵松平容大公篆額

鉱山之盛衰由気運之隆替而国家之興廃係焉福島県岩代国大沼郡
軽井沢有銀山天正中越中人半左衛門與軽井沢人治右衛門所創見
慶長中加藤嘉明之鎮会津也産銀月三四拾貫目民口一千余是為一
盛至元文時産出甚少人家数亡存二三戸而已
是為一衰其後盛衰不一明治以後為髙地森田大島諸氏之有十二年
帰古河市兵衛氏所産月僅五六百貫目後屢々改採掘製練之器械之
制悉倣西洋法障害交至収支不償諸職員若慮百端各尽其力二十年
後月産五六拾貫目或七八拾貫目二十六年得新坑乃至百貫目余之
多現今一月所採掘鉱凡二百万貫目日用鉱夫七百五拾余人民口亦
復一千余是為再大盛嗚呼明治以来王政維新百廃悉興聖徳光被文
明広布上感天下徹
気運之隆万古無比於是鉱山之盛日増一日方法器械月精一月加以
古河氏之至誠与鈴木、秋山、小堀、塚本、西川、伊藤諸氏之勉
励愈進興隆可期而已因記以表鉱山之隆衰且以為聖世之頌云

明治二十七年八月

髙等師範黌教授正六位勲六等
南摩綱紀撰

古河軽井沢銀山事務所長
鈴木誠介書

招魂碑

軽井沢銀山

招魂碑

山形縣　富樫龍三郎
同　最上常吉
広島縣　三国光一
島根縣　吉田元吉
岐阜縣　丸山梅吉
石川縣　田中政吉
福島縣　坂内要吉
同　石山英馬

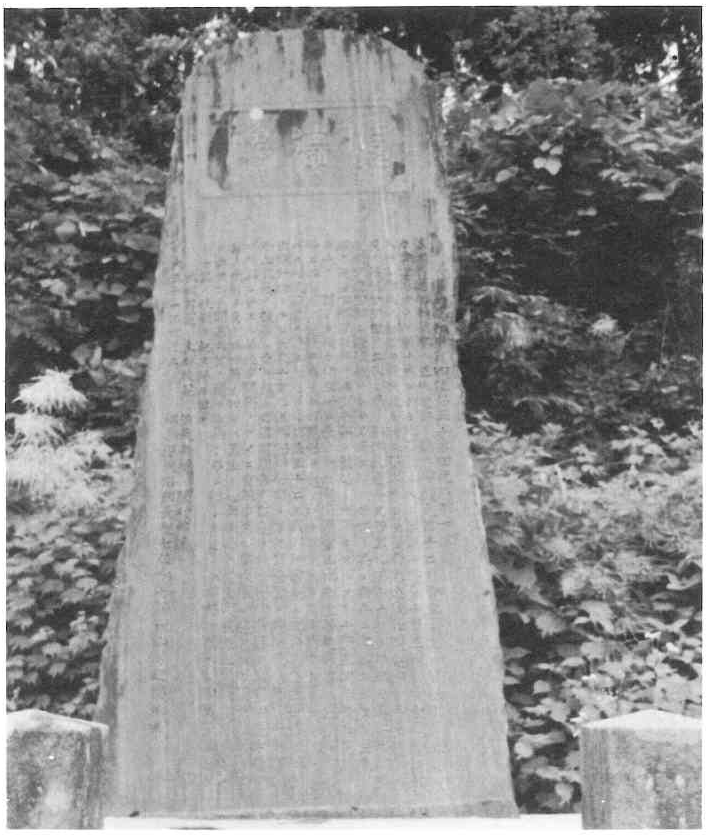
福島縣　小松太作
同　角田定次郎
同　五十嵐要蔵
同　佐瀬竹次郎
新潟縣　落合源之亟
同　斎藤勝次郎
同　岡重五郎
同　青木三吉

明治廿七年九月建之

発起人

奈良縣　福岡藤蔵
兵庫縣　足立寅三
新潟縣　本間長吉

福岡謹書



頌徳碑

竜蔵庵水口薬師境内
（高さ　二四三センチメートル）

頌徳碑

福島県知事宮田光雄閣下篆額

佐瀬翁通称雅蔵字ハ正彬廸軒ト号ス安政元年十二月会津ニ生ル資性剛邁真摯代々会津藩士タリ翁十歳ニシテ北学館ニ入リ漢籍ヲ修メ十有五ニシテ白虎隊ニ編入サレ佛式ノ訓導ヲ受ケ次テ特ニ召出サレテ単発元込銃弾製造方ヲ命セラレ戊辰ノ役樋口岡田ノ二氏ニ属シ鶴城北追手又西出丸備トナリテ孤城ヲ嬰守ス開城後東京真田邸ニ謹慎赦サレテ斗南ニ移リ母姉ト共ニ青森ニ寄寓スルコト三年帰県ノ後警保課農商務省海軍省等ニ歴任シ官職ニアルコト十数年明治二十年笈川村戸長ヨリ転ジテ我ガ柳津村戸長トナル教育産業土木衛生等施設ソノ他宜シキヲ得特ニ二宮翁ノ遺教ヲ奉ジテ報徳社ヲ起シ躬ヲ以テ衆ヲ導キ淳々トシテ倦ムコトナク村民皆ソノ徳ニ化セラル

明治三十二年裁判所書記ヲ拝命シ仝三十六年柳津出張所詰トナ

ル爾來十有九年格勤精励傍ラ禁酒貯金会ヲ設ケ民心ノ統一生活ノ向上風致ノ改善ニ力ヲ致シ又信用組合ノ促進ヲ計リ勤倹貯蓄ヲ奬励シ地方産業ノ振興ニ資スル等地方開発ノ為ニ貢献シタル事枚挙ニ遑アラズ数々官ノ賞賜公ノ表彰ヲ受ク　嗚呼翁ノ如キハ畢生ノ心血ヲ悉ク厚生利民ノ上ニ濺ギタルモノト云フベシ闔邑咸其ノ徳ヲ仰慕シ石ニ鐫シテ之ヲ不朽ニ伝ヘントス予辞セズシテ其ノ梗概ヲ記ス銘ニ曰ク

武徳君恩　文啓後昆
偉哉翁徳　闔村弗諼

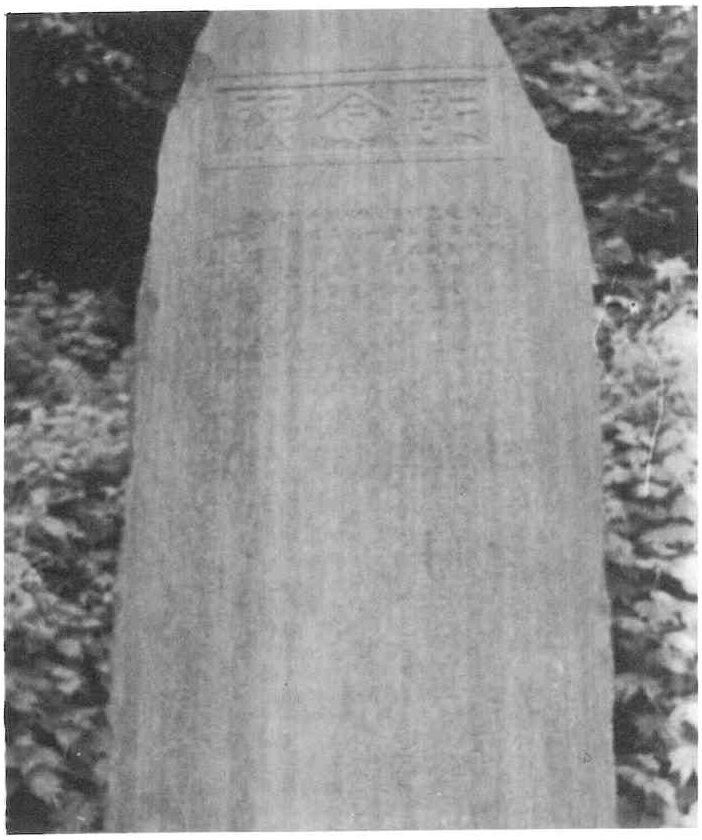
大正十一年四月上浣

福島県河沼郡長
従七位勲七等永山芳之助撰並書

発起人

佐藤新吉　渡部安太郎　山内伝造
佐藤富太郎　戸倉彦弥　伊藤留吉
佐々木鼎　田崎藤七　船木忠次郎
小川虎吉　北田忠雄　増井源蔵
佐藤元八　増井彦三郎　内藤銀次郎
渡部留四郎　新井田宗吉　新井田茂太郎
斎藤清太郎　白井正美　田崎弘作
佐々木孝二　真田長三郎　二瓶藤四郎
田崎清兵衛　田崎久作　斎藤常八
斎藤伊平　鈴木如

石工　原田想三朗



記念碑

―耕地整理―

竜蔵庵水口薬師境内
（高さ　一八五センチメートル）

記念碑

福島県知事正五位勲三等宮田光雄閣下篆額

当下平ノ耕地ハ由來潅排水路乱雑過半湿田ニシテ天恵ノ利用充分ナラズ又只見ノ奔流ハ近年当字ノ良田ヲ浸蝕崩潰シ村民之ヲ憂フルヤ久シ　是ニ於テ有志相謀リテ耕地整理ヲ企画シ明治四十三年法規ノ組合ヲ設立シ仝年十一月工事ニ着手シタルニ工程ノ半途大正二年八月無前ノ洪水ニ遇ヒテ工事ヲ阻止シ仝五年三月竣工ス　工費二千四百円決算ノ上堤防費ニ二百円、五百円ハ組合員反別ニ配当セリ

従前ノ民有地十町二反七畝一歩ト紆餘曲折セル水路小徑、畦畔等ヲ整理シ総面積十二町八反一畝十五歩ヲ完成シ同時ニ護岸堤防モ認可ヲ得大正元年末着手翌二年五月竣工ス工事費中ニ一千八百九十餘円下附サル有志者寄附三百円総額二千三百九十餘円整地ハ区劃整然幹道小徑溝渠ノ配備亦宜シク耕作上ノ利便ト収

穫ノ豊饒トハ曩日ノ比ニアラズ如斯偉業ヲ挙ゲ得タルモノ固ヨリ聖代ノ餘沢ニアルト雖モ組合員協心戮力ノ効果タルニ外ナラズ　依テ碑ヲ建テ後昆ニ伝ヘントス　予ハ斯事業ニ関与スル者村民ノ請ヲ容レ不文ヲ顧ミス敢テ其梗概ヲ叙ス

大正二年花月

福島県技師正六位

耕地整理課長穂坂申彦撰

梅亭　鈴木甚吉書

発起人

組合長　会計　佐藤富太郎

副長　庶務　船木忠次郎

工事係　岩佐豊八

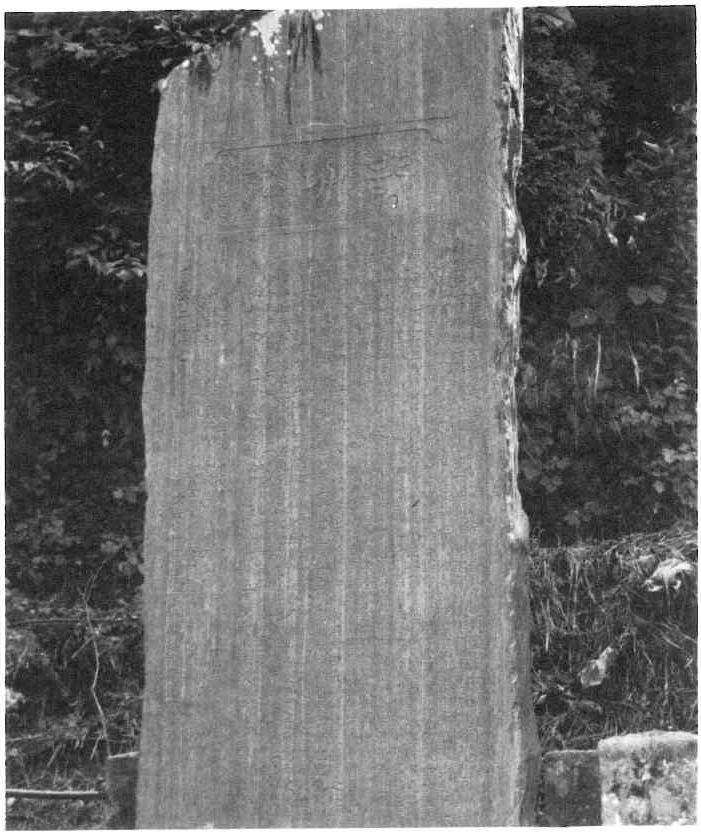
評議員　同　伊藤留吉

評議員　増井源次郎　斎藤吉太郎

北田芳昭　長谷川平四郎

戸倉徳三郎　長谷川清記

船木忠亮　為田正之助



記功碑

龍蔵庵水口薬師境内

（高さ　二四六センチメートル）

記功碑

陸軍歩兵曹長勲七等船木金三郎記功碑

陸軍歩兵大佐正五位勲三等井上璞篆額

陸軍歩兵曹長勲七等船木金三郎君生於福島県河沼郡柳津村学於同地小学校夙見頭角卒業後従事農業傍修漢学詩歌又糾合同志組織安久津青年会尽瘁郷頭及適齢徴入歩兵第六十五聯隊第四中隊志願下士候補者進上等兵受韓国守備任在此一年有半任伍長四十五年累進軍曹大正元年授韓国併合記念章五年属独立守備隊屯開原六年四月参与鄭家屯事件有功七月任曹長八月叙勲八等授瑞宝章越八年一月為開東軍司令部附鞅掌激務得病五月八日旅順病院三十一日依戦役之功叙勲七等授青色桐葉章並従軍記章同日病革溘焉逝齢僅三十有三　十月十七日葬遺骨其郷龍蔵庵墓地会者数百人余亦列儀為文述弔意

君資性高潔寡黙執識謹厳臨事不迫剛健之気象見眉宇之間在軍籍

十二年雖未剣電往来弾雨間或守備韓国或守備満州又参与鄭家屯事件
恩典被栄君常日夫満州露支接壌之地我忠勇義烈之碧血所染為軍人者
宜勤務此地一旦緩急立国防第一線以包屍馬革宜哉欧州戦役餘波及満
州馬賊蜂起交通難而使皇軍之輸送安全鄭家屯事件之起也君勇躍馳趣
欲致身命而事幸帰沈静爾後二年君罹病魔然猶旦重職忘身不肯就後送
遂先輩勇士之後而逝嗟呼壮哉蓋柳津之地山秀水清気風自畢於他郷生
於此地者亦自有所超出於他也　若夫如郷党青年者望君気風而奮起在
天之霊亦冥於地下焉今茲君逝五星霜建碑青年会場傍以表章其功績厳
君萬太郎氏来嘱文於余君曽在余部下者五年不可以不文辞乃記大要係
之以銘曰

建国大本　軍備是主　君入軍営
夙起脩武　二任守備　一従事変
国威益揚　内外恩徧　忠肝義膽
衷身異域　功名永存　可謂殉職
仰飯山嶮　俯只水清　剛気千歳
報国至誠

大正十二年十二月

陸軍歩兵少佐従五位勲四等
功五級上田常男選並書

寿松院碑

猪鼻　角田孫市氏宅

（高さ　一七三センチメートル）

寿松院碑

寿松院角田国家法溢也其系出於大織冠鎌足公後裔越中守国次居
近江始称角田氏天喜五年從源義家征安部兄弟於陸奥国国次後三
世筑前守正家有故　越前屢新田義貞及黒丸城陷死之其子国元来
会津仕葦名氏至国元後七世国家者葦名氏與伊達氏戦敗国家遯匿
天正十九年十月廿日訪天外和尚於野沢村常楽寺数月為其弟子常
思鉱業為国利遍捜名地発見軽井沢銀山投資採掘然信佛之探遂結
一草庵於猪鼻村住焉既而謀天外上洛請以其庵列寺格見允蓮寿山
西光寺是也於是以天外為開山祖国家為開基家構一宇而移居農村
民請官以国家為猪鼻村里正後国家自生埋於墓地中打鐘廿一日而
鐘聲絶蓋至此瞑矣時慶長十三年六月三日也法溢曰寿松院弦随正
覚庵主至其後十三世国直以家事鞅掌辞里正国直後四世国秀承家
因今勒寿松院來由及角田家乗之梗概於碑石以後云爾

明治四十四年九月廿四日

星野胤国選

目黒重介書

角田国秀建

頌徳碑

藤分校地内

（高さ　一・七三センチメートル）

頌徳碑

人之生也奉天而順命而己奉天則師而仁子而孝順命則可以守分進
徳也飯谷村齋藤源次為人温厚篤実幼穎悟好読書卒業於小学校也
有負笈之志而父母慮学資之不給不許則晴耕雨読有疑則就小学校
長齋藤吉太郎質焉終入福島県師範学校明治四十年七月二十日卒
業任河沼郡群岡尋常高等小学校訓導兼組合立農業補習学校訓導
教授丁寧訓導懇切生徒懐徳有司及各村父兄属望而一朝病熱而死
矣在職二月年僅二十学友子弟深哀惜焉樹石謀不朽来請銘於余語
曰慎終追遠民徳帰厚矣餘惜源次之無年而哀其子弟之失良師也揮
涙銘之銘曰

維仁維孝　于徒于親
奉天順命　歎徳不淪

明治四十一年十一月五日

福島県河沼郡視学　鈴木重正撰
髙橋　淳書

特志修路記念碑

藤新道西入口
（高さ　一七五センチメートル）

特篤修路記念

笠　間　恵氏

独力自発改修千米突

工費　壱萬五千円也

竣工　昭和二十年十二月

爲表彰氏之徳

藤　区

区　長　小瀧久松

世話人　新井田清

笠間主殿　鈴木辰造　渡部吉次　斎藤猪象

斎藤義臣　内川英雄　鈴木清八

長谷川鬼代次

請負人　袖野吉次

入山溜池記念碑

郷戸入山

（高さ　九三センチメートル）

記念碑

河沼郡柳津町町長笠間恵篆額

名　称　入山溜池災害復旧工事

原　因　昭和三十一年七月大豪雨により堤防決壊

請負者　仙台市湊土木工業株式会社

起　工　昭和三十一年十月

竣　功　昭和三十三年六月

総工費　七百七十九万八千円也

国庫補助　金四百六十二万六千円也

地元負担　金三百十七万二千円也

設計技師　江花　誠

渡部幸雄

柳津町長　笠間　恵

柳津町議会議員　斎藤　章

委員長　鈴木　広
副委員長　鈴木清信
会計　斎藤茂雄
委員　斎藤清美
斎藤勇三
斎藤常治
志保原伊佐美
長谷川吉雄
斎藤弥吉
鈴木浅十郎
鈴木　亘
鈴木龍夫
田崎徳衛
田崎為七
斎藤喜一
芳賀金市
鈴木三郎
田崎幸衛
長谷川義一
地主受益者一同

昭和卅四年四月建之

華蔵寺再建記念碑

石神華蔵寺境内
（高さ　一三〇センチメートル）

華蔵寺再建記念碑

興禅護国論曰天哉心乎天之高不可極也心出于天之上地之厚不可測也而心出于地之下天地待我而覆載日月待我而運待四時待我而変萬物待我而発生大哉心乎夫天地間人物成形而後萬一物不具此心者故一生作業成無上菩提由之隅二途由之悟由之迷由之孝由之忠由之興家由之表家由之出生入死莫不由之者也佛教東斬入我神州感化人心翼賛政化茲壹千数百年徳兆咸浴厥化懐厥徳大哉佛乎当山伽藍昨冬爲大雪遭倒潰之厄於茲檀徒諸氏爲佛恩報謝奮起精進経営再建而工完竣仍而勤石以示範後昆爾云

維時大正六丁巳歳九月一日

現円蔵兼華蔵寺住職沖津堪宗選並書

耕地整理記念碑

石神、郷戸分校地内

耕地整理記念碑

名　称　河沼郡柳津町字郷戸耕地整理組合

反　別　二十八町八反余

工　費　壱萬三千余円

起　工　大正十二年四月　仝十五年四月完成

国庫助成金　二千円

県補助金　三千八百円

附属工事　入山溜池　隧道及樋管埋没工事

昭和十七年着工　仝十八年四月完成

県補助金　四千円

福島県耕地課長柴田道生書

組合長　田崎信次郎

副組合長　斎藤長次郎

仝　鈴木健二

会計　田崎源栄

評議員　斎藤辰恵

鈴木清五郎

鈴木千代八

鈴木市太郎

志保原新二郎

長谷川文太郎

鈴木始

長谷川藤松

福島県知事従四位勲三等加瀬清雄篆額

柳津村郷戸新村の両部落は古来水利に乏しく加ふるに田区不整耕作の便を欠くこと甚し是を以て耕地整理の議起り大正十一年十二月組合を設け県の設計に依り其の指導を受け大正十二年四月工を起し拮据経営四閲年にして克く其の工を竣ふ舊田を興し新田を闢くこと二十八町八段餘道路溝澮拡張し区劃井然排水潅漑の利耕耘交通の便昔日の比にあらす而して入山蛇沢に潴水池を築き以て旱魃の患を除く実に闔郷心を一にして其の完成に努力したる結果に因らずばあらす費金壱万参阡余円国庫助成金弐阡弐百餘円県補助金参千八百餘円を給して之を奨励す今茲に組合会の議決に依り記念碑を建てて永く之を記念せむとす乃ち其の梗概を叙す

昭和四年六月

地方事務官正五位勲四等佐瀬剛撰並書

上田土地改良事業記念碑

安久津上田
（高さ　一五二センチメートル）

上田土地改良事業

記念碑

県知事　木村守江書

上田地区の耕地は過半が湿田で改良整備がなされず区画の形状は錯雑不規則にて各人の所有は散在し道水路は迂回屈曲し降雨時における石生沢からの流水による被害の多い生産性の低い地域であったが郷戸原地区の開田事業がなされその排水が上田地区の用水源となるを契機に昭和三十四年小団地開発整備事業計画地域の指定をうけ同年十月工事に着手昭和三十五年五月幾多の困難をのり越えて竣工し区画整理と用排水路及び農道の新設等により十三・五ヘクタールの乾田と一・五ヘクタールの畑地の区画整理に成功し併て土地の交換分合により耕地の集団化がなされ農家経営の安定と合理化に多大の寄与がなされた。

記

一、事業種目　小団地開発整備事業

二、事業主体　柳津町上田地区土地改良区

三、事業年度　昭和三十四年度

四、事業概要

1. 事業量　十五ヘクタール

2. 総事業費　三百七拾三万円

3. 施行者　東洋開発株式会社

水道新設記念碑

野老沢薬師堂北
（高さ　一四二センチメートル）

水道新設記念碑

小林春駒書

総工費　六、六八六、六〇七円也
設計者　山口水道設計事務所
施行者　福島光和設備工業
㊞　鈴木土建
竣工　昭和三十九年十二月十八日
建設委員
委員長　目黒　鼎
副委員長　長谷川　重喜
会計　長谷川　義次
同　長谷川　広一
同　斎藤　吉右衛門
書記　長峯　千代美

補償係　長谷川　喜好
仝　長谷川　喜一
仝　白井　幸一
仝　斎藤　文男
特別委員　斎藤　実
仝　白井　正義
工事委員　斎藤　寅一
斎藤　豊
斎藤　勝

工事委員　長谷川　幸正
長谷川　忠雄
斎藤　盛栄
目黒　昭
斎藤　享
白井　正一
長谷川　平内
立会人　長谷川　文一
斎藤　新左衛門

学童供養塔

塩野地内

昭和三十七年十二月六日

学童供養塔

柳津町長　笠間恵書

昭和三十七年十月十九日午後五時下校の砌り貨物自動車に便乗
不幸にして事故にあい逝去す痛惜の至り依而供養の為め篤志寄
附により之を建立す

小学五年　新井田　夏　江
小学六年　佐　藤　　薫
小学六年　佐　藤　トミ子
中学一年　倉　本　トメ子
中学三年　倉　本　末　子

発起者　軽井沢塩野両部落一同